

日本計量生物学会

ニュース・レター No.56

1996年 7 月

目 次

巻頭言
第4回計量生物セミナーのお知らせ
1996年合同年次大会報告
1996年度日本計量生物学会総会報告
第18回国際計量生物学会議報告
Biometricsの要約
研究助成金のお知らせ
関連学会等のお知らせ
日本学術会議関係報告
1996年度第1回理事会議事録
会計理事からのお知らせ
事務局からのお知らせ
その他

前田 博（藤沢薬品工業）

8月27、28日、DIA生物統計学第3回年会（東京）が開催される。本ワークショップも3年目を迎え、8月末の行事として定着した感があることは、プログラム委員会の一員として誠に喜ばしい。昨年度からプログラム委員会の事務方を務めているが、プログラム確定までの経過は、8月の年会の折りに次年度のテーマを決め、11月には具体的な演題、演者候補を検討し、その後、プログラム委員会の委員およびDIA本部が分担して演者候補の各氏に依頼し、4月には演題、演者がほとんど確定するという段取りである。5月にDIA本部へプログラムを送付し、また、厚生省へ後援名義使用許可申請書を提出した時、ようやくひとつの山を越したという安堵感が得られる。本ワークショップの運営上の特徴は同時通訳と発表原稿（またはスライド原稿）の配布である。特に後者は演者の先生方には多大な負担となり、事務局にとっても原稿集めおよびコピーなど煩わしいところもあるが、参加者には好評である。

1994年に開催された第1回年会のテーマは、日米欧3極間の統計学的医薬品評価方法論に関する類似性および相違であり、日本、欧州、米国の順にそれぞれ3人の演者が講演し共通の認識に立つことが出来た。昨年の第2回年会のテーマは、クリニカルアウトカム研究であり、エンドポイントに関する演題が5題、薬剤経済に関する演題が4題、その他の演題が4題というプログラムであり、いずれも時宜にかなうものであった。

DIA生物統計学第3回年会

今年は3つのテーマを選んだ。まず、ICHでも話題になった「日米欧の統計解析ガイドラインの比較」、次に、日本国内でも検討が盛んになった「前臨床試験における統計的諸問題」、それから、今年から「特定薬効分野の統計解析」を取り上げることとし、第1回目は「骨粗鬆症」となった。各テーマのオーガナイザーを、それぞれ佐久間昭先生、吉村功先生および大橋靖雄先生に担当いただき、演者への依頼を含め、演題および演者を決定いただいた。

「日米欧の統計解析ガイドラインの比較」の演者は、FDA：Robert O'Neill, MCA：John Lewis, ノースキャロライナ大学：Gary Koch, 統数研：佐藤俊哉, 東京理科大：吉村功, および山之内製薬：魚井徹の各氏である。また、「前臨床試験における統計的諸問題」では、毒性試験の統計解析について、ハノーバー大学：L. Hothorn, Battelle社：Ronald Menton および東京大学：浜田知久馬, 発癌性試験の統計解析について、ヘイズレトン研究所：Ajit Thakurの各氏が講演される。「骨粗鬆症」では、メルク社から骨折をエンドポイントとした大規模試験、イーライリリー社から3極同時開発の事例について講演があり、日本からは東京大学：大橋靖雄, 東京都衛生局：林泰史, および埼玉医大：板橋明の各氏が講演される。

合計14演題中、8演題が海外からのものであり、欧米での臨床試験、薬効評価の理解に大いに役立つものと確信している。また、活発なディスカッションにより参加者相互が共通の認識を持つに至ることを期待している。

第4回計量生物セミナーのお知らせ

第4回計量生物セミナーを下記の要領で開催いたします。セミナーの詳細および申し込み方法は追ってお知らせいたします。

1. 日 時：1996年11月9日（土）、10日（日）
2. 場 所：富士教育研修所（静岡県裾野市）
3. 参加費：宿泊費，食費含む

臨床の部 企業30,000円，
大学・研究機関15,000円

生物の部 15,000円

4. テーマ：

生物の部「分子系統樹と生物進化」

核酸配列から分子系統樹を推定し，ながい生物進化の過程をたどるための種々の手法の理論的背景と，それをさまざまな生物種に応用した場合の問題点について，時間をかけてゆっくりと討議する場にしたいと思っています。

臨床の部「臨床検査値の諸問題」

1996年応用統計学会・日本計量生物学会合同年次大会報告

特別セッション「植物の成長と繁殖の予測のための数理モデル」のコメント

自然条件下に生育している生物は，気象，大気，土壌，水などの条件の変動の影響を絶えずうけながら成長と繁殖をおこなう。これらの変動は，生物生産や自然保護を目的とした研究からみたととき，ひとつの環境問題としてとらえられる。植物においては，環境予測しがたい諸環境要因の変動の下における成長と繁殖を，なんとかして少しでも正確に予測し制御したいという願いから，収量予測，成長解析，遺伝子型×環境交互作用，繁殖戦略などの研究課題がうまれた。今回はこのような植物と環境の関わりにおける数理モデルとその周辺に焦点をあてて，3人の方に講演をお願いした。以下その要点を記す。

小林和彦（農水省農業環境技術研究所）「量－効果関係はなぜ振れる：オゾンが作物収量に及ぼす

影響」

近年における大気中オゾン濃度の増加により作物収量が低下するおそれが生じたので，オゾン濃度と収量の「量－効果関係」が調べられた結果，作物成長期間の平均オゾン濃度と減収率の関係の記述にはワイブル分布が適当と判明した。しかしその関係は品種，場所，年次によって振れやすく不安定なことがわかった。これに対して従来，オゾン量を重みつき平均にする，平均濃度でなく濃度積算値にするなどにより，量－効果関係の振れをできるだけ抑えようとしたが成功していない。演者はこれに対して，むしろ量－効果関係は本来振れるものと考え，振れをどう無くすかではなく，なぜ振れるかを考究した。すなわちオゾン濃度と最終結果である収量との直接的関係ではなく，収量の構成に至る個々の成長プロセスに立ちかえってオゾンの影響をモデル化し，原因と結果の間に介在する諸プロセスを明示的に導入することにより量－効果関係を再構築した。これにより，振れの原因（の一部）が見え，また振れを解消できない場合もあることが分かった。

竹澤邦夫（農水省北陸農業試験場）「植物の成長のノンパラメトリック回帰による予測」

植物の成長に及ぼす環境の影響は要因が多くかつ変動することから単純なモデルでは表現しがたい。演者は，成長率，生育ステージが変化する時期，水稻収量などの予測にノンパラメトリック回帰がどのように有効かを提示した。とくに，水稻収量の予測は社会的にも影響の大きい課題であるが，毎年水稻収量データについて，栽培技術の進歩や品種選択による変化を滑らかなノンパラメトリックな関数で近似し，また気象変動に基づく部分をランダムな変動分離とみなし，両者を分離することができることを示した。これにより前者が従来言われていたような頭うちを伴う上昇曲線とはいえないことを示した。

酒井総樹（東北大学理学部）「野生植物における最適成長の理論的解析」

一年草は，一年のうちに栄養器官を構築し，繁殖を終えなくてはならない。そこで栄養成長から繁殖成長にいつ切換われば種子生産が最大になるかが問題になる。これは野生植物においてどのよ

うな成長スケジュールをもてば自然選択上有利かを考える上で重要である。これに対し、発芽後しばらくは栄養成長だけを行い、ある時点で繁殖成長へ突然切換わる方法が最適という説が出された。しかし実際には多くの一年草は、栄養成長→栄養成長+繁殖成長→繁殖成長、という漸進的変化をもつ。なぜか。ひとつの有力な説は、自然条件下では突然の環境悪化により個体が枯死するという危険に絶えずさらされており、それを考慮すると、漸次繁殖成長に移る方法が有利になるというものである。本講演では、また茎の高さの進化や林床での草本地上部の季節性の進化についてのモデルが紹介された。

講演の最後に15分の討論を行った。

鶴飼保雄（東京大学農学生命科学研究科）

一般講演Ⅲのコメント

山本精一郎（国立がんセンター研究所）、大橋靖雄（東大医）「時間によって変化する曝露の複数の生存時間に対する因果効果の推定」

本研究では、生存時間解析において発症歴が時間依存性交絡要因と考えられる場合、時間によって変化する曝露の複数の生存時間に対する因果効果を、いわゆるmarginal modelを用いる方法やconditional modelに基づく方法により推定すると、それらの結果に偏りが生じる危険性のあることが示された。また、その対応法として加速モデルを想定した上での多変量ログランク統計量や尤度比統計量に基づく新しい推定方法が提示され、実データへの適用例として、頻回再発型ネフローゼの再発時間に対する免疫抑制剤シクロスポリン投与の効果に関する臨床試験データの解析結果が紹介された。この研究に対して、因果帰無仮説の定式化における問題や発症歴を説明要因へ取り込んだ場合の推定結果の解釈に関して、質疑応答がなされた。

山口拓洋、大橋靖雄（東大疫学・生物統計学）「施設間差を考慮した生存時間解析」

本研究では、癌の再発や死亡などの事象発生ないし打ち切りまでの時間をエンドポイントとする多施設臨床試験データに対し、施設間差を変量効

果として比例ハザードモデルに組み込んだ混合効果モデルおよびそのモデルのもとでの推測方式が提案された。実データへの適用例として、アドリアマイシン系の抗癌剤の尿路癌に対する臨床試験データへの解析結果が紹介された。本研究に対しては推定過程での解の収束性や推定結果に対する解釈について質疑応答が行われた。

大瀧 慈（広大原医研）

特別講演Ⅱのコメント

吉村 功（東京理科大工学部）「医薬品開発に関連するデータの解析におけるいくつかの注意点」

吉村功先生は、本テーマについて講演していただく最適の人であると思います。医薬品の審議をする中央薬事審議会の委員ですし、ICH（International Conference on Harmonization）統計ガイドライン検討班の座長も務めています。そういったことから、私が先生の講演にたいして座長をさせていただくことを光栄に存じます。

医薬品開発全般におけるデータ解析がテーマでしたので、講演内容も幅広くなり、聴衆のほうも質問がしづらかったように見受けました。ただ、医薬品開発の流れについては等しく素養を身に付けられたものと想像します。

先生は毒性試験では数々の研究をしてこられましたので、多少そちらの話題が中心でした。しかし、同等性の検証についての見解、最適用量の決定についての疑問など、臨床面での最近の研究も紹介されました。特に、用量設定試験にCochran-Armitage検定を紋切り型に適用して、統計学的に有意であれば成功というような安易なやり方でいいのだろうか、というような話もありました。製薬業界の統計家は、確かにいろいろの手法には熟知していますが、問題の本質をあまり考えず、人から言われたから使うといった習性の人が多いのかなとも思いました。

多重性の問題、モデルベースの解析をしないのかといった質問が出たように記憶していますが、純粹に学問レベルの話と認可に伴う行政レベルの話では、多少話が食い違う点があるように感じました。多重性はよく問題視されますが、それは単一の試験内だけで良い話なのか、新薬申請となると概要中のすべての試験にたいしてなのかも問題

になるかもしれません。

全体的な感想としては、基礎（前臨床）と臨床では考え方が非常に異なるようでした。特に、毒性試験では毒性のないことを目標にしていますので、大変ユニークな検証の図式になっています。また、そこへ多数個のパラメータがあるのですから複雑です。臨床でいうと、安全性情報の評価が似通っているかもしれません。それから、学会員の多数があまりこの分野のことを知らないことも、質問等から気づきました。その意味から言うと、この分野への関心を高めることへ役かったださったものと確信します。

折笠秀樹（富山医科薬科大）

一般講演Ⅳのコメント

二日目午後の第一セッションである。プログラムでは4件の報告が予定されていたが、1件が取り消され3件の報告となった。

岩崎学・佐藤秀明（成蹊大学）「連続変量のグループ化の影響評価－「1分間の脈拍値」は何秒間測るか－」

連続変量のグループ化はデータ記述のために意図的に行うこともあれば、サンプリング方式により区間データしか観測されないということからも頻繁に生じる。グループ化データは区間中 h 、中央値 x_j 、代表値 y_j で特徴付けられるが、これらパラメータのモーメントに与える影響は古くから研究されている。本報告ではグループ化データで定義される離散分布と元の連続分布との乖離度を定義し、 $N(0,1)$ の場合の計算例を示した。この乖離度はCox（1957）の定義と異なり、 h と x_j のみの関数となる。応用として、10秒間測定して得た脈拍値を6倍して1分間の脈拍値とすると過少評価になるとの警告がなされた。実際にはグループ化の影響の他に測定のばらつきが拡大される影響があり、この測定法にはかなり問題がある。日常行動の中にありがち、かつ見落としがちなミスの指摘であり興味深い。

佐藤俊哉（統計数理研究所）「ノンコンプライアンスとサンプルサイズ設計」

2群比較のためのランダム化臨床試験における

治療不遵守に係わる統計的問題である。治療不遵守は群間差を小さくする方向の偏りを生じるので、例数設計時にそのことを考慮しないと所与の検出力が得られないことになる。通常はその期待値への影響を考慮した例数設計が行われるが、分散の補正を行わないと不十分であるとの指摘がなされた。本報告ではさらに通常の二項分布を基に算出するのとは異なる、ランダム化に基づく因果帰無仮説の検定を基にした例数設計方式を導き、具体例で通常用いられる簡便法が約2%の過少評価になることを示している。

丹後俊郎（国立公衆衛生院）「Statistical Inference on the Difference of Paired Proportions」

対比較におけるMcNemar法による同等性検証については種々議論がある。とくに、治験薬と対照薬とが同じ反応を示した例がすべて省かれ、残った少数のunlike pairsのみに基づいて推論され、しかもpositiveな結果が出易いことに疑問が持たれている。その対処として一つは元々群間比較で定義された許容差 $\Delta=0.1$ を調整する方式が議論されているが、本報告は変量モデルを導入することにより、同じ反応を示した例からの情報を回復することを試みている。今のところ最尤推定量がパラメータ定義域の端で得られたときの漸近論が未解決であるが、薬剤間の相関を表すパラメータ ρ が持つ情報などが活用されると興味深い。従来から、同じ反応を示した例数が多いこと自体が薬の類似性を示しているのに、それが同等性検証にまったく反映されないのが奇妙であるとの議論があるからである。

広津千尋（東大計数工学）

1996年度日本計量生物学会総会報告

日 時：4月25日（木）12時10分～12時30分

場 所：慶應大学北里講堂

議事次第：

総会の開催に先立ち、正会員348名からの委任状132通（白紙・議長宛116、その他16通）、出席者26名の確認があり、会則19条に基づいて総会の開催を高木庶務理事が宣言した。

1. 1995年度事業報告

高木庶務理事より、1995年度事業報告がなされた。

2. 1995年度決算報告

魚井会計理事より、1995年度決算報告がなされた。

3. 1995年度会計監査報告

芳賀監事より会計監査結果相違ない旨の監査報告がなされた。

1995年度事業報告、決算報告、会計監査報告について承認された。

4. 第3回計量生物セミナーについて

上坂理事より、第3回計量生物セミナーについて、雑誌に掲載する予定であるとの報告がなされた。

5. 1996年度事業計画

高木庶務理事より、1996年度事業計画の説明がなされた。

6. 1996年度予算案

魚井会計理事より、1996年度予算案の説明がなされた。

1996年度事業計画および予算案について承認された。

7. 会費値上げについて

IBS本部への送金の値上げへの対応と予算の安定化のため、会費の値上げが必要であることが、魚井会計理事から説明がなされ、会則7条の改正案が提案された。

後述のような訂正案が承認され、併せて補足3条の訂正も承認された。

庶務担当理事 高木廣文

会則の改正について

本年度の総会において、下記のように会則の改正案が提案され、承認された。

(改正前)

7. 会費として正会員は年額8,000円、学生会員は4,500円、賛助会員は一口10,000円以上を毎年1月末日までに納入しなければならない。ただし、国際計量生物学会からの機関誌Biometricsの送付を希望しない者の会費は、正会員・学生会員とも年額3,500円とする。

[補則]

3. 1991年度の会費は現行のままとし、上記7.の会費は1992年度より施行する。

(正会員8,000円、学生会員4,500円)

(改正後)

7. 会費として正会員は年額10,000円、学生会員は5,000円、賛助会員は一口10,000円以上を毎年1月末日までに納入しなければならない。ただし、国際計量生物学会からの機関誌Biometricsの送付を希望しない者の会費は、正会員・学生会員とも年額4,500円とする。

[補則]

3. 1996年度の会費は現行のままとし、上記7.の会費は1997年度より施行する。

(正会員10,000円、学生会員5,000円)

1995年度決算報告

(1995年1月1日～12月31日)

収入の部				[単位:円]
項目	予算額	収入	備考	
・会員収入	2,634,475	2,593,500		
A会員	229,075	224,000	3,500 × 64	
B会員	1,944,800	1,827,000	8,000 × 228.4	
C会員	30,600	22,500	4,500 × 5	
賛助会員	430,000	520,000	10,000 × 52	
・会費未収金	259,350	366,000		
・賛助会費未収金	310,000	460,000		
・会費前納金	0	1,024,700		
・雑収入	30,000	1,605		
銀行利息		1,605		
・前年度繰越金*	881,445	881,445		
銀行		500,656		
郵便局		138,000		
現金		26,039		
その他		216,750	特別会費貸付金	
合計	4,115,270	5,327,250		

*: 95年度会費 ¥89,500.- を含みます。

支出の部				
項目	予算額	支出	備考	
・本部送金	1,096,680	1,014,239	平均 1\$=96.00(含手数料) 送金額 \$11,157	
・印刷費	1,200,000	840,008		
ニュースレター	500,000	349,268		
Journal	700,000	439,861		
その他	0	50,879		
・会議費	355,000	187,749		
・通信費	300,000	315,040		
・人件費	600,000	520,000		
・消耗品費	87,000	59,657		
・雑費	20,000	5,593		
・予備費	456,590	0		
・次年度繰越金	0	2,384,964		
統計関連連合		100,000	年会開催費として貸出し	
銀行		2,141,580		
郵便局		106,000		
現金		37,384		
合計	4,115,270	5,327,250		

特別会費	
項目	
収入	232,000
前年度繰越金	-216,750
支出	0
次年度繰越金	15,250

特別事業 第3回計量生物セミナー			
前年度繰越金	735,256		
第2回未収金	15,000		
参加費	2,730,000	30,000×67, 15,000×48	
銀行利息	1,118		
収入合計	3,481,374		
第2回テープおこし	274,225		
研修所払い	1,672,521		
演者交通費	185,000		
通信費等	10,955		
その他	51,153		
支出合計	2,193,854		
次年度繰越金	1,287,520		

会計監査報告

日本計量生物学会 殿

1995年1月1日より12月31日までの会計経理を監査した結果、会計報告の通り相違ないことを認めます。

1996年 3 月 15 日

監事

芳賀敏郎 (印)

柳 幸武美 (印)

1996年度予算

(1996年1月1日～12月31日)

収入の部				
項目	予算額	前年度予算額	前年度実績	備考
・会員収入	1,073,950	2,634,475	2,593,500	
A会員		229,075	224,000	(3,500x78x0.85+
B会員		1,944,800	1,827,000	8,000x270x0.85+
C会員		30,600	22,500	4,500x8x0.85)-1,024,700
賛助会員	520,000	430,000	520,000	10,000 x 52
・会費未収金	259,350	259,350	366,000	
・賛助会費未収金	0	310,000	460,000	
・会費前納金	0	0	1,024,700	
・雑収入	0	30,000	1,605	
銀行利息	0		1,605	
・前年度繰越金*	2,284,964	881,445	881,445	
合計	4,138,264	4,115,270	5,327,250	

*: 96年度会費 ¥1,024,700.- を含みます。

支出の部				
項目	予算額	前年度予算額	前年度実績	備考
・本部送金	1,352,340	1,096,680	1,014,239	平均 1\$=110.00(含手数料)
・印刷費	1,318,000	1,200,000	840,008	
ニュースレター	350,000	500,000	349,268	
Journal	968,000	700,000	439,861	
その他	0	0	50,879	
・会議費	250,000	355,000	187,749	
・通信費	350,000	300,000	315,040	
・年会開催費	150,000	0	100,000	統計関連連合
・人件費	600,000	600,000	520,000	
・消耗品費	87,000	87,000	59,657	
・雑費	20,000	20,000	5,593	
・予備費	10,924	456,590	0	
・次年度繰越金	0	0	2,284,964	
合 計	4,138,264	4,115,270	5,327,250	

特別会費		
項目		
収入	150,000	2,000 x 75 口
前年度繰越金	15,250	
支出	330,000	
次年度繰越金	▲164,750	

1996年度会費および会員数(1996年2月15日現在)

A会員	(雑誌Biometricsを購読しない正会員)	3,500円	78名
B会員	(雑誌Biometricsを購読する正会員)	8,000円	270名
C会員	(雑誌Biometricsを購読する学生会員)	4,500円	8名
		合計	356名

賛助会員 18社

第18回国際計量生物学会議 (IBC96) 報告

1. 全体の状況

吉村 功

参加者は同伴者を含めて約600~700人で、日本からの参加者は17人くらいであった。くらいというように曖昧なのは、リストにJapanとして外国人名があったり確認できた不参加者の名があったりしたからである。1時期に比べて日本からの参加者が少ないのでは?, という質問が昼飯のときに出たが、吉村は、最近は分野を限定した各種の国際集会が多くて、そういうところに出ると時間や費用の関係でこのような一般的な会議には出にくくなるのだ、と答えた。

並行セッションが五つと多いため発表内容について評価を行うのは無理であるが、プログラムを見たところでは例年と特に変わった傾向や、流行的なものは感じられなかった。

次回は1998年で、開催地は南アフリカのケープタウンである。

2. 地域会長・事務局長会議 (Regional Presidents and National Secretaries Meeting) の報告

佐藤俊哉

7月1日に会合が開かれ、駒澤会長の代理として出席してきました。

最初の議題はTechnology CommitteeからIBS home pageについて。暫定的なhome pageはできたので、regionのhome pageとのリンクなどを行うとの報告。続いて、IBC98の組織委員長からケープタウンの紹介。報告事項として、副会長と事務局長の公募依頼、ASAとの雑誌JABES (ジャベス) について、不慮の災害時の保険、各regionの会員数、Biometric Bulletinへのregionの情報掲載、評議員および委員会名簿、新しいパンフレットの完成。協議事項として、

○Membership Committeeの設置：現行のApplication Formを改訂して、もっと詳しく専門分野などを調べてはどうかと議論があった、

○Education Committeeの設置：IBCの前後に教育的なセミナーを実施することについて意見交換がなされた

○IBC2000の開催時期：6月~8月が提案されてい

るが、アカデミックイヤーとの関係で6月はやめてほしいという意見があった、

○各regionの会費上乘せ分：原則として20%、

○本部への送金期限：3月のBiometrics送付の名簿を固定するためには1月31日までに送金してほしい、3月分をおまけと考ええると3月までに送金、

○ビジネスオフィス：Charles McGrathとDavid Santiniから報告、

を検討した。これで時間いっぱい。新しいIBSの英語パンフレットを日本語に翻訳するとしたら正式な許可が必要なのかと、ビジネスオフィスのSantiniに尋ねたところ、許可は必要ない、翻訳したものを2部オフィスに送ってくればよいとのことだった。また駒澤会長から頼まれていた「日本支部は今後もIBCトラベルファンドに協力を続けたい」という意向は、会議終了後に直接Morgan会長に伝えた。

3. 編集助言者委員会 (Editorial Advisory Committee) の報告

吉村 功

7月2日に会合が開かれた。今回は特別な決定を行う事柄はなく、一般的な状況についての意見交換を行っただけであった。どちらかというと電子的手段の利用に議論の焦点が合わせられた。たとえば現在、印刷が決まってから実際に発行されるまで7ヶ月が必要である。もし最終原稿の送付やゲラの校正にメールが使えれば、時間と費用の両面で負担の軽減が可能になる。しかしそうすると、国際間の不整合によるトラブルと電子的手段が利用しにくい人に対する差別化が起こる。いつの時点でどの程度のレベルでの電子的手段の利用を標準にするか、明確にしなければならない。これは場合によっては雑誌をinternet上にのせることにもつながるが、そのときは費用負担、セキュリティの確保が問題となる。さらには、著作権やオリジナリティをどこで認めるかも問題となる。リサーチメモをinternet上に置いて同分野の人にすでに読ませるようにしてあった場合、同じ内容を雑誌に載せることは新規性がないのではないか、というわけである。

実務上では、ある程度の電子化は進行していて、編集理事からの査読依頼はまずメールで行なわれ、OKならば原稿が送付され、結果はまたメイ

ルで届けられる。編集理事と投稿者とのやり取りも、可能な範囲でメールが使われている。そういう手段を取れる方が投稿者にとっても有利になっている。開発途上国の研究者にとってはときに悔しいところがあるかもしれないが、やむをえないのであろう。通信、交通といった面での途上国への援助には今後もっと注意すべきであろう。

今年からJournal of Agricultural, Biological, and Environmental Statistics (JABES) が刊行されている。2年前の約束では、IBSの全会員にサンプルを無料で送ることになっていたが、郵送料の負担が大きすぎるということで取りやめになったという報告があった。それでも各支部に何部かはサンプルを送るべきであるという意見が出た。実行されることを期待したい。

Biometricsの投稿論文の採択率は現在約30%である。数年前に問題となった長期の発行待ちの問題は今回は取り上げられなかったから、採択と発行のバランスは取れているようである。

4. 評議員会 (Council Meeting) の報告

佐藤俊哉

7月4日に開催され、前日までに開かれた各委員会の報告があった。地域会長・事務局長会議と重複しない内容は、

○JABES: 最初の2年間はIBS, ASA会員に無料で配布することになっていたが、購読料15ドルとしたことについて、最初の号だけでもサンプルコピーとして無料で配れないか、という提案があった。Executive Committeeでこの提案を検討することにした。

○Fellows Committee: IBSにFellowというカテゴリーを置く。各regionからノミネートされた候補をFellows Committeeが審査し、2年ごとに10名ずつを選ぶ(ただし、最初の4年は20名ずつ)。

Award Fund Committeeからのレポートによると、今回のIBCへのトラベルファンドのサポートは日本: 3000ドル, Austro-Swiss: 1650ドル, German, WNAR: 1500ドル, Australian, British, French, Nordic: 1000ドル, Spanish: 500ドル, Belgian: 400ドル, Corsten Biometry Fund: 2500ドルであった。ここでいったん休憩。

再開後、後半はほとんどが地域会長・事務局長

会議でた話題。やはりIBCの前後に教育コースを実施するかどうかについてはいろいろな意見が出された。会長がちなみに挙手を求めたところ、やる、やらないがちょうど半々であった。現在、吉村と佐藤はICHの統計ガイドラインに関するExpert Working Groupのメンバーであり、その中で生物統計家としての資格に関わる内容があるので、その教育コースを受けることでコース修了証 (credit) を与えたり、生物統計家としての資格を与えることは可能かと質問してみた。それは急には難しい、もう少し時間が必要だろう、とLinn Billard副会長のコメントがあった。これで3時間の会議は終了。

IBC96参加日記: 抜粋版

佐藤俊哉 (統計数理研究所)

6月30日 (日)

午後7時から学会の登録と親睦を兼ねたget togetherに。Emastraatからトラムに乗ると日本の方に挨拶される。どなただか分からずに日本人特有のあいまいな会釈を返すが、あとで奥野先生から三輪先生もCok Hotelに泊まっているとうかがって、あっあれは三輪先生だったんだと分かったいへん申し訳ないことをしてしまった(三輪先生すみませんでした)。ダム広場からブラブラ歩いて旧証券取引所内のGran Cafeへ。もう関係者が列をなしている。学会への登録を済ませ、学会グッズを一そろいもらってCafeへ。Cafeもごった返して足踏み場もないくらい。ずんずん入って行ってとりあえず飲み物をゲットする、ハイネケンドラフトだ。後ろに放影研の柴田先生と中島先生を見かけたが、ぎっしりで後戻りできず前進するのみ。奥野先生ご夫妻がいらっしゃったので、挨拶に行くと「どうせろくな食べ物はないから、適当に飲んだら飯でも食いにいこうや」。部屋をぐるっと一周してやっと柴田先生と話ができる。柴田先生は先週はモスクワ、今週学会に出て、その足でサンクト・ペテルスブルグに行くという、「今回は埋め草だから、学会にはあまりはじめには出ないよ」。広島の前田先生もいて、放影研コホートの血液サンプルの同意の問題について、妻も入って話をする。

チャペルヒルのMargolin先生がいたのですか

さず挨拶する。妻がまたチャペルヒルに行きたい
という、「いい研究を続けていれば機会がある
さ」。そうじゃなくて今行きたいんだけどなあ。

奥野先生がもういこうというので奥野先生ご夫
妻、柴田先生、私と妻で奥野先生がお泊まりのホ
テルオークラへ。お寿司をごちそうになってしま
った。奥野先生ありがとうございました。奥野先
生のお話ではジェネーヴァというオランダの焼酎
がおいしいそうで、「彼らはヤングとかオールド
とかいっとるけど、そんなんじゃなくて30年もの
がうまい」んだそう。なんでも、クイントイルの
石塚さんが交換留学でアムステルダムに来たとき
に、30年もののジェネーヴァを10本買ってこいと
命令したところ、酒屋のおやじに「一年に15本し
かできないのに、10本も売れるか」と怒られたと
のこと。もうすっかりできあがって、10時そこそ
こに失礼し、タクシーでホテルに帰る。まだあた
りは明るい。

7月1日（月）

今日から学会。歩いてゴッホ美術館の前まで行
きトラムでアムステルダム自由大学（VU）へ。
今日からは学会に頼んでおいたトラム・バス5日
間乗り放題券を使う。ちょうどコーヒープレイク
に着いた。柴田先生と立ち話して、Invitedの
“AIDS in the 1990's”へ。妻もAIDSの話は聞きたい
というので一緒に行く。Johns Hopkinsの
Ron Brookmeyer, Fred HutchinsonのSteve Self,
そしてCDCのGlen Sattenがコメンテーター。
Brookmeyerはコホートデータとマーカーによる
クロスセクショナルデータを組み合わせてHIV感
染数を推定する話、SelfはHIVワクチントライアル
の話。集団免疫の関係でワクチンの有効性を臨
床試験で判定することは難しいのだそうだ。コメ
ンテーターのGlenは、私がチャペルヒルにいた
ときにちょうど一緒にいて、この間レフェリーを
頼んだがまだ返事をもらっていないのでセッション
が終わってから督促に行く。

今日は駒澤先生の代理で15時45分から地域会長
会議に出席しなければならない。運悪く、もっ
とも聞きたかったInvitedの“Noncompliance in
Clinical Trials”が地域会長会議の時間に変更とな
りたいへん残念だ。はたしてRobinsは学会に來
ているのだろうか。

急いで地域会長会議に。まず出席者の自己紹介。
隣にすわったのは何とOdd Aalen先生でした。会
議の内容はIBC報告を参照してください。

すっかりくたびれたので、レセプションはパス
してホテルに戻る。

7月2日（火）

会場に行くとコーヒープレイクで、今日からミ
ネラルウォーターが置いてある。SPAというブ
ランドで赤と青の瓶があったので赤をとったらこ
れがガス入りの方で大はずれ。放影研の柴田先生
に会う、「まじめに出てるじゃないですか」。しば
らくして広津先生がやってきて、「ずいぶんまじ
めじゃない」、これには柴田先生も苦笑。広津先
生と私は午後同じセッションで発表。「今日のセ
ッションはノンコンプライアンスのセッションみ
たいだね」、でも先生最初の3題だけです、「残り
は2つしかないじゃない」。丹後先生とちょうど
Editorial Advisory Committeeの会議中の吉村先
生もいらしてしばし談笑。「今Biometricsの審査
を全部e-mailで行って、時間を短くするという話
をしてたんだけど、あなたがe-mailを使っていな
いから、日本のcouncil memberだってe-mailを使
えないやつがいるから困る、といっておいたよ」、
多少複雑な心境ではある。ケース・コントロール
研究のセッションにいくとなつかしや、
University of North CarolinaのKant Bangdiwala
に会う。Kantは私の顔は憶えていたものの名前
が出てこない。セッショントップはWashington
大のNorman Breslow。2段階ケース・コントロ
ールの最尤推定の話題だが、なぜかtwo-stageで
はなくtwo-phaseを使っておられた。O.Borganは、
ネステッド・ケース・コントロールから疾病発生
割合を推定するという話。S.O.Samuelsonはネス
テッド・ケース・コントロールでconditional
likelihoodではなくpseudo-likelihoodを使って推定
する方法。次の発表者がキャンセルしたので、
Breslow先生にご挨拶して部屋を出る。

さていよいよ発表である。前回のカナダでの
IBC94では、たかだか20分程度の発表だからと原
稿も作らず高をくくって発表したら、これがもう
メロメロ。英語はでないは途中詰まるわで、今回
も原稿は作らないつもりでいたら「前回あんなに
ひどかったのに、どうして原稿を作らないのか」

と妻にいわれては原稿を作らざるを得ないではないか。今回は原稿も作って、練習もバッチリ。奥野先生がわざわざ聞きに来てくださった。最初はオランダのEls Goetghebeur (何て読むんだ!)。降圧剤の臨床試験データで、ノンコンプライアンスがあるとき、Robins流のrandomized analysisだと複数のパラメータ推定は難しいので、Heitjan-Rubin流のcoarse data modelで推定するという内容。次は私で、春の計量生物学会で発表したものと同じ内容。質問がぜんぜん出なかったのがちょっとがっかりだが、アムステルダムでもちゃんと笑いだけはとって来ました。エストニアのK. Lappは最初に発表したGoetghebeurと同じデータに対しRobinsのstructural mean modelを用いてrandomized analysisを行った結果。3題まとめて座長のHeyting先生からコメントがあり、全ての対象者がコントロール治療を受けた場合というcounterfactualはもうもとのpopulationとは違うといていたが、それは誤解です。私が例に出したMRFITについてフロアからコメントがあった。続いて広津先生が順序対立仮説の検定について話された。最後は、アメリカのA.P. Hallstoneが生存時間がエンドポイントの場合の医療コストの推定。コーヒーブレイクの時ドイツの人がきて、randomized analysisについて、なんでコンプライヤーとノンコンプライヤーで層別して解析しないのかと質問された。何でいけないのか、みなさん考えてみましょう。

夜はMayor's reception。Centraal Stationの向かいの船着き場から海洋博物館まで船が出るというので駅まで行くが、どこの船着き場なのか分からない。と向こうから前会長のLinn Billardと事務局長のElizabeth Barathが歩いてきたので、この二人についていけば安心だろうとみているとずんずん駅とは反対の方向に歩いていく。どうやらお二人は歩いて海洋博物館にいくようである。妻があのだというから、前会長と事務局長だというと、「どおりで肩で風切って歩いているわけだ」。やっと船着き場をみつけ海洋博物館へ。すでに中はごった返している。ジェネーヴァをもらい妻はビール。例によって食べ物はカナッペ程度がほんのちょびっとでるばかり。ビールをもらってしばらくするとMayorだかその代理だかがメッセージを読んでいるが誰も聞いちゃいない。中

は息苦しいので外に出るとKantがいたので話す。子供達は元気か、木曜に写真をみせる、などとたあいもない話をしていると私のセッションでMRFITについてコメントした人がいたので一緒に話す。なんとZelterman先生でした。先生はMedical Uses of Statisticsという本の15章Contingency Tables in Medical Studiesを書いている方で、homogeneity test, long survivorの分析などの論文をBiometricsに書いている。日本ではBiometricsのサマリーの翻訳をされていて、long survivorの論文はおれが翻訳したといたら喜んでいた。飲むだけで食べ物がないのでフラフラになってきた。8時までなのでみんな帰りだした。帰りは船は出ないので駅まで歩く。

7月4日 (木)

今日も雨で風が強い。午前中雨で昼曇り夕方晴れというパターンが続く。今日は昼に吉村先生とDIAおよび統計学会の発表の打ち合わせをするので、学会の昼食券を買いに受付に。Breslow先生も17ギルダーの昼食券を買っていたので、おはようございます。Council Meetingはやはり自己紹介からはじまる。内容はIBC報告を参照してください。

昼食のレストランに向かう途中丹後先生と一緒にいる。入り口付近に奥野先生ご夫妻、吉村先生ご夫妻、柴田先生を発見。17ギルダーも払ったのに、ブローチェ (オランダのサンドイッチ) 2種類、クロワッサンにゴーダチーズのスライスを2枚はさんであるのと四角いコッペパンに黄色いゲロゲロしたものがはさんであるの、あとは牛乳、コーヒー。目が点になる。丹後先生は声をかける間もなくどんどん先に行ってしまったので、私は入り口付近に戻って吉村先生達と合流する。黄色いゲロゲロはカレーマヨネーズのようでけっこうまいのがこれまたなさない。パクパクッと食べて、吉村先生と打ち合わせ。吉村先生はこのときのためにあらたに買ったシンクパッド持参で、さっそくEditorial Advisory Committee Meetingの内容をニュースレター掲載用にまとめていた (これがIBC報告として掲載されたものです)。「あとはあなたがCouncil Meetingの内容を加えてさ、掲載してくれなあい」、わかりました。DIAと統計学会でのICH統計ガイドラインについての

発表は、統計学会は吉村先生が出席したワシントンでの第一回会合の内容を中心に、DIAは先月われわれが各担当に送ったCPMPガイドラインの訂正案の理由を中心にする事で合意。はあー、また日本に帰ってからたいへんだ。午後は奥野先生の講演を聴きに行きますという「こんでええ、こんでええ」。

1時45分から奥野先生の発表を聴きにいく。ベルギーのDagnelie先生がつかつかとやってきて、「君は日本のCouncilだね。私は日本でIBCを行ったときに会長だったDagnelieです」、よく存じております、「これはあくまでも私の個人的な意見だが」と前置きされ、「日本はIBSのmajor regionであるにもかかわらず、committee activityが低いので、IBS内で日本の意見はunder representativeになっている。Executive committeeにも、ほかのcommitteeにも日本人はいないではないか。日本からももっとcommitteeに参加してほしい」、たいへんよくわかりました、ただ、私たちにはことばの壁があって難しいのです、「私も母国語はフランス語なので、英語はハンデがありましたが、思い切って活動してきました。あなた達は私よりもたいへんでしょうが、もっとcommitteeに参加してほしいと日本の理事会に伝えてください」、どうもありがとうございます。奥野先生の講演はIBS50周年記念にちなんで、日本の農事試験におけるfractinal factorial designの50年史。あとの講演は失礼してポスターを見る。

7月5日（金）

最初はEcologic Studiesのセッションで、Harvard大のJamie Robins、最近売り出し中のIARCのMartyn Plummer、Fred HutchinsonのRoss Prentice。思えば長かった。'90年のENARの大会でRobinsの発表を聴きにいったところ、Robinsの発表はキャンセルされたと座長のアナウンス、同じ年のSociety for Epidemiologic Researchの大会ではSander Greenland先生にRobinsは来ているかと聞くと、「俺もJamieを探しているんだが、よかったら一緒に来い」というので会場内を探すものの来ていないようであった。そして前回のIBC94。ノンコンプライアンスのセッションでRobinsの発表があるので聴きにいくと入り口に張り紙が「Robinsの発表は取り

消されました」。いよいよ、きょうRobinsに会えるかもしれない。そんなわけで、きょうの一番最初に吉村先生の講演も重なっているのだが、もうしわけありませんが今回は失礼いたします、吉村先生お許しを。

受け付けでFred HutchinsonのLue Ping Zhaoに会う。Lue Pingは3月に統数研でGEE IIの講演をしてくれた。やあやあと一緒にEcological Studiesのセッションへ。よく見えるように真ん中に行こうとすると、おいおいどこにいくんだ、一番前で聴くんだ、というのでOHPのど真ん前で聴くはめに。Prentice先生、座長のRay Carrollはもう来ていて、なにやらマフィアの若頭のようなのがOHPの横で一心不乱にOHPシートに何か書き込んでいる。Lue Pingが「Jamie、タベホテルで何か考えついたのかい」といってるところをみると、あれがRobins先生なのか?しかし、頭は爆発してないぞ。確証をつかめないまま、とりあえずPrentice先生にご挨拶する。「私はあなたがGreenberg Lectureをしにチャペルヒルに来られたときにお会いしたサトウといいます。Ed Davisと一緒にお昼を食べました」、といったところで絶対憶えているわけではないんだが、そこは紳士のPrentice先生「ええ、憶えていますよ」、うそでもうれしいもんだ。はじまった、やっぱり赤銅色したマフィアの若頭がRobins先生だった。Robins先生の話はAmerican Journal of EpidemiologyのEcological studies: Biases, misconceptions, and counter examplesと同じ内容。Ecological studyではcross level biasの調整が必要であり、最近のPrenticeの研究ではそれを考慮していないと批判していた。Martyn Plummerの話はつまらなかった。Prentice先生はmultipopulation cohort studyという、複数の地域のecological studyと各地域から限られた人数のsubsampleをとる、ecologic studyとコホート内ケース・コントロールを組み合わせたようなデザインを提案していた。International diet and cancer studyというのを計画中で、がん登録を行っている地域に参加してもらい、がん登録情報とecological data、それと300人ほどのコントロールのサンプルをとる計画らしい。3人とも、なぜecologic studyかの答えは、単一のコホートでは得られない広い範囲の曝露レベルが得られる、古

典型的なmeasurement errorに対してロバストである、なぜecologic studyはダメかの答えは、バイアスのコントロールが難しい、といていた。終わった後、Robins先生に挨拶に行く。「日本からきたサトウだ」というとすぐにrecognizeしてくれ、「おお、お前とここで会えてよかった」、Greenland先生とはじめて会ったとき以来久しぶりに興奮しました。

ポスターをみにいってZelterman先生と少しお話しするが、次のセッションの時間なのでNutritional Epidemiologyへいく。最初のスピーカーの話が全然おもしろくなかったので、早々に出る。これで今回の学会も終わり。

Biometricsの要約 (Vol.51, No.4)

“Estimating Variance Functions in Developmental Toxicity Studies (pp.1523-1528)”

D.Bowman, J.J.Chen, and E.O. George
「生殖発育毒性における分散関数の推定」

生殖発育毒性データの解析において同腹仔内相関の存在はよく知られた事項である。生殖発育毒性データで観察される同腹仔内相関係数は一般に服用量ごとに異なる。本論文では平均母数と共に同腹仔内相関係数を服用量の関数とするモデルに一般化推定方程式を用いる。我々の方法はPrentice and Zhao (1991) による平均と分散関数の推定法に似ている。

山本英二 (岡山理科大・理)

“Analysis of Proportions in the Presence of Over-/Under-dispersion (pp. 1400-1410)”

S.R. Paul and A.S. Islam
「超過/過小変動を伴う場合の割合の分析」

毒性学 (奇形学や変異誘発性) や他の同様の分野でよく現れる、超過変動あるいは過小変動を伴う状況のもとでの割合の均質性の検定手続きについて考察を行なう。ここでは、パラメトリックモデル、つまり拡張ベータ二項モデルと、疑似尤度あるいは拡張疑似尤度のようなセミパラメトリックモデルにおける $C(\alpha)$ 検定統計量あるいはスコアタイプ統計量と、Rao and Scott (1992) が

提案した計画効果と効果的標本数の考え方にもとづく手続きについて考える。シミュレーション実験により検定手続きのサイズ、検出力、分布のずれや変動の均質性のずれに対する頑健性について検討を行なった。シミュレーションデータについてはベータ二項分布、プロビット正規二項分布、ロジット正規二項分布を用いてその生成を行なった。その結果、現実に関り得るような個体数 (number of litters) と同腹仔数 (litter size) では、疑似尤度にもとづくスコア検定がここで考えた分布の中では全体的に最もよく水準を維持し、また時に他の統計量にまさる検出力を示すとともに中程度の変動不均一性については頑健性を示すことが確かめられた。また、この統計量は非常に単純な形をしており、帰無仮説のもとでのパラメータ推定しか必要としない。

越智義道 (大分大・工学部)

研究助成金のお知らせ

がん集学的治療研究財団第17回一般研究助成金

対象：がんの集学的治療に関する研究一般。

助成金額及び期間：150万円、1年間

申込締切：1996年8月31日

連絡先：財団法人 がん集学的治療研究財団

〒102 千代田区九段北4-1-9 市ヶ谷MSビル

TEL03-3239-2341

関連学会等のお知らせ

国際疫学会第14回学術会議

日時：1996年8月27-30日

場所：名古屋国際会議場

会費：会員40,000円、非会員45,000円

テーマ：Global Health in a Changing Environment

連絡先：名古屋大学医学部予防医学教室内会議事務局

TEL 052-744-2132 内線5022

FAX 052-733-6729

e-mail: i45457a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

DIA生物統計学第3回年会

日時：1996年8月27、28日

場所：がん研究振興財団国際研究交流会館 (東京、

築地)

会費：20,000円～56,800円

テーマ：巻頭言を参照してください

連絡先：DIA事務局

FAX 03-3531-8506

日本学術会議関係報告

1. 総会等

・日本学術会議第123回総会は平成8年4月17日に開催され、「脳科学研究の推進について（勧告）」が可決された。また運営審議会附置会員推薦手続き検討委員会が廃止され、関連研究連絡委員会等指定委員会が設置されることになった。

・日本学術会議の建物を横浜市みなとみらい21地区32街区へ移転することについては、財政的にほとんど無理な状況で、凍結せざるを得ない状況のようである。

・日本学術会議が共催できる国際会議が従来の6件から8件にふえた。

2. 第16期第4回統計学研究連絡委員会（平成8年4月30日）

委員長より報告事項として、1) 国際会議代表派遣候補として第18回国際計量生物学会への派遣を申請したが、不採用であった、2) 新しい方式の数理科学国際研究所設置準備小委員会では、附属施設として実現する案を検討中で、統計数理研究所は無理との判断をしている、3) 統計関連学会の懇談会ではインターネットによるニュースの速報等を検討している、その他。

審議は“大学における各分野での統計の教育とその体制”について、以前の議論をふまえ、医学部での教育、阪大での状況、文献の紹介等を中心に検討を行った。

終了後、統計関連学会選出の委員のみで、統計関連学会の懇談会で検討されている1) 共通名簿の作成、2) インターネットによるニュースの速報、3) 事務局の問題について意見交換を行い、特に3) については各学会の意見を聞いてきてもらうこととした。

藤井 光昭（日本学術会議会員 第4部）

1996年度 第2回理事会議事録

日 時：1996年4月25日（木）12：30～13：30

場 所：慶應大学医学メディアセンター第一会議室

出席者：駒澤（会長）、高木（庶務）、魚井（会計）、上坂、鶴飼、折笠、佐久間、佐藤（俊）、丹後、野澤、林（以上理事）、芳賀（監事）、栗原（事務局）

1. 前回議事録の確認

前回議事録について、若干の字句訂正、および内容の確認後承認した。

2. 第4回計量生物セミナーについて

昨年同様、11月上旬に富士研修センターで行う予定である。セミナーのテーマとして、生物関係については、系統樹の推定、生態学関係の話題を考えているとの説明が、鶴飼理事からあり、また臨床医学系については、安全性評価と臨床検査に関する話題を考慮中との、上坂理事からの説明があった。ニュースレターの7月号に、セミナーの予定を掲載することにした。

3. 次回の年会について

応用統計学会の柳川会長から、次回も合同年次大会を継続したいとの意向が、駒澤会長に伝えられているとの説明があり、次回も合同で年回を行うこととした。また、大会実行委員会に10万円の拠出を行うことを承認した。

4. 次期選挙について

1997～1998年の役員選挙のための選挙委員として、田村義保氏（統計数理研究所）と橋本修二氏（東京大学）に依頼することにした。

5. その他

佐久間理事から、統計学と疫学の研究者へのがん助成金公募があるとの説明があり、ニュースレターに詳細を掲載することとした。

庶務担当理事 高木廣文

会計理事からのお知らせ

1996年度の会費の納入をお願い致します。本学会の会計年度は国際計量生物学会の会計年度に合わせて1-12月です。B会員およびC会員で、会費を1年間未納にした会員は規定に従い雑誌Biometricsが届かなくなります。本学会の運営を健全にするためにも、これまでに会費を未納にしている会員は、本年分と合わせ至急会費をご納入下さるようお願い致します。

開発途上国援助のための「特別会費」は、会費に2,000円上乗せをお願い致します。なお、特別会費を送金される場合にも通常の会費納入口座を利用し、特別会費であることを通信欄に明記して下さい。詳しくは、ニュース・レターNo.48巻頭言をご覧ください。

*A, B, C会員会費に2,000円上乗せして下さい。

会 費	1996年度	1997年度
A会員	3,500円	4,000円
B会員	8,000円	10,000円
C会員	4,500円	5,000円
特別会費*	2,000円	2,000円

A会員：Biometricsを購読しない正会員
B会員：Biometricsを購読する正会員
C会員：学生会員（Biometricsを購読する）

郵便振替口座：

00150-2-22365 日本計量生物学会

銀行振込口座：

第一勧業銀行飯田橋支店

普通 061-1499027

日本計量生物学会

または、

三和銀行 飯田橋支店

普通 624-3596166

日本計量生物学会

会計担当理事 佐藤喬俊，魚井 徹

事務局からのお知らせとお願い

銀行振込で会費を納入していただく場合、機関名が長いと会員名が切れてしまい、どなたからのお振り込みか、事務局では分からなくなることがあります。銀行振込の際には、必ず会員名を先頭にしてください。

学会への連絡、問い合わせ等は手紙またはFAXで下記事務局までお願いします。また、所属、連絡先等に変更のあった会員の方は、事務局まで御一報下さい。

ニュース・レター編集委員会からのお願い

編集委員会では会員からの原稿を募集しています。国内・国外での関連学会への参加報告や印象記、海外での研究・活動状況などの報告を歓迎します。

ニュース・レターに掲載されているBiometrics掲載論文の日本語サマリー作成は、会員の方々のボランティア活動におすすがりにしています。編集委員会から翻訳の依頼がありましたら、ご多忙中とは思いますが、御協力をよろしくお願い致します。

私の家の近所に西新井大師があります。この間、散歩がてらブラブラと西新井大師に行って、名物草だんごを食べました。西新井の起こりは、東国に悪疫が流行して人々が困っていると、天長3年弘法大師様がこの地に立ち寄り、災厄一切を自分の像に負わせて井戸の中に沈めたところ、悪病は一切なくなったそうです。この井戸が新しく建てたお堂の西にあったことから「西新井」という地名になったらしいのです。ちょっと待ってくださいよ。大師様の像を沈めた井戸の水なんて、おそれ多くて飲めるはずはありません。ひょっとすると、弘法大師様は井戸を封じることによって悪疫を退散させたのではないのでしょうか。むむむ、これはどこかで聞いたような話ですぞ。ロンドンにコレラが流行してJohn Snowがブロードストリートのポンプを止めたのが1854年、天長3年は826年ですから、Snowに先立つこと1000年。世が世なら弘法大師様は疫学の祖とっていたかもしれないですね。

日本計量生物学会事務局 〒106 東京都港区南麻布 4 - 6 - 7 統計数理研究所駒澤研究室内 FAX 03 (3446) 1695 栗原恵美子	編集委員会 越智義道, 佐藤俊哉, 林 邦彦 〒106 東京都港区南麻布 4 - 6 - 7 統計数理研究所 (佐藤) TEL 03 (5421) 8764 FAX 03 (3446) 1695
---	--